宮崎県立看護大学研究紀要6(1):1～9,2006

講　座

フロイトは何を遺したか
－フロイトの復権（2）－

布施　裕二

【キーワーズ】　エロス，破壊本能，幼児性欲，エディプス・コンプレックス

第二回　「本能論」の行方

さて，「本能」について説かれる「第二章　本能学」である。

「エスの要求緊張の背後に認められる力をわれわれは『本能』Triebと呼んでいる。本能は精神生活に表現された身体的要求を意味する。それは一切の精神活動の最終原因であるが，その性質は保守的である。」(159頁)

まさに「本能論」である。「一切の精神活動の最終原因」とまで言い切るのだからスゴイ。「性質は保守的」であるとされるのは何故なのか。生きていくためには，守りに入ることが必要ということか。それが前回述べた，「自我」という名の「精神装置」の部分を生み出すということなのか。いずれにせよ，その「本能」とはいかなるものかを見てみる。

「ところでわれわれは，長い躊躇と動揺の後に，二つの基本本能『エロス』と『破壊本能』を認めることを決心した（自己保存本能Selbsterhaltungstriebと種族保存本能Arterhaltungstriebの対立，自我愛Ichliebeと対象愛Objektliebeの対立もやはりエロスの中に含まれる)。エロスの目的はしだいに大きくなっていく統一体を作り出し，これを維持・継続すること，すなわち結合であり，他の本能，破壊本能の目的は，反対に結合を解消し，事物を破壊することにある。破壊本能の場合は，その最終目的は生物を非生物状態に還元することにあるように思われる。それ故，この本能を呼んで『死の本能』ともいう。」(159頁)

本能のあり方として，「結合」と「破壊」という，二つの相反する性質のものを持ってきている。そして，前者の中にも「自己保存」と「種族保存」，「自我」と「対象」という相対立する性質を持つものを含ませている。これはその中身はともかく，対象を性質の対立したあり方として捉えようとする，フロイト独特の姿勢が見られる。前者は性質の異なるものを結びつけようとする本能であり，男女の性的な結びつきを，その代表としている。それに対して後者は，その結びつきを壊そうとするものであり，戦争（当時は第二次世界大戦の最中だった）を行うことを最たるものとして，自分を破壊しようとする自殺衝動に至るものまでを「本能」として捉えている。それらは実際，どのように現れているのか。

「生物学的機能の中では，この二つの基本本能が相互対立的に，または結合的に作用している。一例を挙げれば，食事という行為はその食物を摂取しようという最終目的のために対象を破壊することである。また，性行為も最も密接に対象と結合しようという意図に支配された攻撃性である。この基本本能の共同または相互作用が生命現象を非常に多彩なら

Yuji Fuse：宮崎県立看護大学

しめているが，さらにこの類推は生物の領域を越えて，無生物を支配している引力と反発力の対立にまで拡大されるのである。」(166頁)

ここまで述べると，単なる「本能」という枠を越えて，生物や無生物の全てのものに貫かれている，いわば「根本的なあり方」と言えるレベルにまでなっている。「引き合う力」と「反発する力」との対立にまで，その意味が拡大されているのである。脚注には，「この基本力あるいは本能の説明に対して，分析学者たちでさえもいまだに大いに反対している人々がいるが，すでにこのような思想は哲学者アクラガスのエンペードクレスの熟知していたところである。」(同) と述べている。すなわち，哲学者の言葉を借りながら，自分の見方の正当性を説いているのである。この意味で，他の精神分析医達とは異なった「境地」に入っていると言える。自然界のあり方も含めて，自分の見方を貫こうとしている，そのあり方がである。

フロイトが挙げている，ギリシャの哲学者エンペードクレス（およそ前490－430）は，シュヴェーグラー「西洋哲学史」(谷川徹三・松村一人訳，岩波文庫）によると，次の様な説を述べているという。

「かれの哲学体系を簡単に特徴づければ，それはエレア学派の有とヘラクレイトスの成とを結合しようとする試みであると言うことができる。かれは，かつて無かったものが生ずるということもなく，有るものが消滅することもないというエレア学派の思想から出発しながら，不滅の有として，分割することはできるが，独立で互いに他から導出されぬ，永遠の四元素（土，水，空気，火）を立て，これに自然の生成を説くヘラクレイトスの原理を結びつけて，これら四元素は二つの動かす力，すなわち結合するものとしての愛と分離させるものとしての憎みとによって混合され形成されると考えた。」(61頁，傍点はシュヴェーグラーによる)

ここで述べられているのは，「永遠の四元素」というものが，「結合するものとしての愛」と「分離されるものとしての憎しみ」という力によって，変化させられているということである。フロイトの場合も，「エロスという結合する本能」と「破壊という結合を無くす本能」という二つの力によって，人間の精神のあり方が規定されると説いている。自分のその説明の根拠を，ギリシャ時代の哲学者の説に置いているのである。そこでは，そうしないと，自分の論の正当性を得られないという，彼の苦しい立場も見ることが出来る。

けれども，そこまでして正当化したい二つの本能で捉えられる現象は，あまりにも単純化されている。上述の「食事」や「性行為」においてである。たとえば「食事という行為は，その食物を摂取しようという最終目的のために対象を破壊することである」とあるが，それは食事という現象を，「結合」と「破壊」という面から見ているだけである。本来，食は「基礎代謝・生活労作にみあったエネルギー源・細胞の再生産・成長に必要な栄養物の摂取」[1] にある。すなわち，細胞のつくりかえに必要な栄養を摂取するのが本来の目的であり，そのための行為が食事である。「対象を破壊する」のは，その必要な限りにおいてであり，フロイトの言うほど，破壊ということにそれほどの意味はない。消化吸収しやすくするだけのことである。それゆえスープ類などを摂る時に，「破壊」を意識することはあまりない。また，「性行為も最も密接に対象と結合しようという意図に支配された攻撃性である」と捉えているが，それもまたその行為の特殊な現象を，「結合」「破壊」という面から見ているだけのことである。

要するに，ここでは「エロスの本能」と「破壊本能」を説明するために，「結合」「破壊」と見える現象が挙げられているだけなのである。「結合」「破壊」という目で見れば，そのように見えるということで，それは食や性に限ったことではない。それゆえ，そのような見方がおかしいとかと，それを批判的に云々

しても仕方がなく，何故にそのような本能の説明をフロイトはしなければならなかったのか，それを見ていくことの方が大事と言える。

フロイトの「本能学」で大事なのは，「リビドー」（エロス・エネルギー）という概念である。それが人間の行動を決定づける大きな役割を持つとされる（「破壊本能」はフロイト理論の後期に出されたものである。何故それが出されねばならなかったのかは，後に検討することとなる）。

「（略）自我は全生涯を通じてリビドーの大貯蔵庫である。対象へのリビドー備給によってリビドーが対象に向かって流れ出したり，逆に，自我に備給されて自我に流れ込んだりする。それはアメーバが偽足を動かす活動に似ている。ただ完全な恋愛状態では，リビドーの主要量は対象に移行し，対象はある程度自我の代理となる。生活現象におけるリビドーの重要な性格の一つは，その『流動性』，一つの対象から他の対象へとリビドーが容易に移行し得る軽快さにある。この反対の場合には，特定の対象へのリビドーの『固着』が生ずるわけであるが，これはしばしば一生の間保たれるものになる。」（161頁）

ここにフロイトの基本的な見方が出されている。リビドーという性的なエネルギーが，どのように流れるかという，「リビドーの流動性」が，精神の働きの上で大事だとである。そしてそれがスムーズに流れる場合と，流れが止まって固着してしまう場合とがあるということである。「精神装置」で見たように，エスから生じるリビドーをコントロールする役割を持つ自我が，そこでどのように働くかが問われることになる。

「リビドーが身体的起源を持っていることそしてまたリビドーが種々の器官，身体部位から自我に流れ入ることは明らかである。このことを最も明瞭に認識できるのは，われわれがその本能目標によって，性的興奮と名付けているリビドー活動である。このリビドー興奮がひき起こされる身体部位で最も著しい部分を『快感区域』と呼ぶが，本来身体はすべてこの快感区域なのである。」（161頁）

ここでは，リビドーという身体起源を持つ性的なエネルギーが，「種々の器官，身体部位から自我に流れ入る」とされる。これが彼の「本能論」の前提となる。ただ，それを「明らかである」と言われても，すんなりと理解できるわけではない。「種々の器官，身体部位」という身体的なあり方から，「自我」という言わば精神的なあり方に，「身体起源を持つ性的エネルギー」が流れ込むと言われてもである。そこのつながりは，そのような直接的なものなのか，あまりにそれを単純化しすぎていないかとである。たとえ「最も明瞭に認識できるのは性的興奮」だと言われて，その時生じる身体変化が本能に基づくものであると理解できたとしてもである。まして「本来身体はすべてこの快感区域」と言われても，本当なのか？と思うだけである。そのような困惑をよそに，フロイトは次のように説く。

「かくしてわれわれは，自分たちの人生に決定的な影響を及ぼすべき定めを持った性的志向は，特定の快感区域によって代表される多くの部分本能 Partialtrieb が相次いで生じてくるうちに，漸次そこから発達してきたものあることについて，一定の知見を得ることができたわけである。」（161～162頁）

このようにして，フロイトの人間観は，リビドーという性的なエネルギーが，どのように身体部位に流れ込むか，そこでリビドー興奮をどのように引き起こすか，それがどのように変化・発展していき，その人間のあり方を決めることになるのか，とまで言うのである。これは「人間機械論」ならぬ，フロイト版「人間リビドー論」とも言うべきもので，愛のエネルギーたるリビドーのあり方で，人間存在の

あり方が決まってくるという。

それゆえ，フロイトが何故にそのように説くのかを知るために，「第三章　性的機能の発達」を見ていくことになる。すなわち，フロイトにとっては「生まれついて持っている」リビドーが，どのような流動性を持ち，それがどのように固着して現象していくかを見るには，「発達」的観点が必要ということである。

「従来の見解に従えば，人間の性生活とは，主として自己の性器と異性の性器とを結合させようとする働きである。接吻とか，異性の身体を眺めたり手に触れたりすることとかはその際の随伴現象であり性交の先駆行為としてあらわれる。そのような傾向は思春期になって，つまり性的成熟に達する年齢になると必然的に出現して，生殖作用に役立つものであるといわれている。」(162頁)

ここではフロイトから見た「従来の見解」というのが挙げられている。まず「性生活」というのが，「生殖作用に役立つもの」であり，そのための行為が「自己の性器と異性の性器とを結合」させることだとである。そして，「そのような傾向は思春期になって」「必然的に出現」するものだとである。それに対して，フロイトはどう説くのか。

「ところが常にこのような認識の狭い枠にはめこまれないような幾つかの特殊な事実が知られているのである。(1) 第一に，自分と同性の人物や同性の性器にだけ魅力を感ずるという人々がいることは注目すべきことである。(2) 同じく第二に，その欲望は性的なそれと全く同じように活動するのであるが，その場合性器がもちいられず，むしろ性器が正常に使用されない人々がいるのである。これらの人々を呼んで倒錯者という。(3) 第三に著しいことは，多くの，それがあるために変態とみなされていたような子供たちが，非常に早期に自己の性器に興味を示し，性的興奮の現われを示すということである。」(同)

ここでは三つの現象が挙げられている。「同性愛」「フェティシズム」(物神崇拝：物によって性的満足を得る)「幼児性的願望」である。これらが「従来の見解」における「性生活」と大きく外れているのは，それらが「生殖」に関わるものではなく，しかも「思春期」以前になされているように見えるものもあるからである。

このような現象を「従来の見解」に対置させていること自体，フロイトの卓見と言える。何故にそのような性的現象が見られるのか，それを「性生活」という観点から捉えようとしていることがである。単なる「異常」として切り捨てるのではなく，その現象の意味を問うていった結果，彼は次のように述べることとなる。

「精神分析学が，これら三つの従来ごく軽く扱われていた事実の研究と関連して，性に関する通俗的な見解に反対したとき，周囲からの激しい注目と，批判を浴びたのは当然のことであった。

a 性生活は思春期になってはじめて開始されるものではなく，出生後間もなく認められる明確な現われをもってはじまる。

b 性的 sexuell と性器的 genital という二つの概念をはっきり区別することが必要である。前者はより広い概念であって，性器とは何ら関係ない多くの活動をも包含している。

c 性生活は各身体区域からの快感獲得機能を包括しているが，これらの各身体区域からの快感獲得機能は，成長するに及んで生殖活動という目標の下に統合される。この快感獲得機能と生殖活動という二つの働きが完全には一致しないということも（倒錯の場合のように）しばしばである。」(同)

これがフロイトの出した答である。ここに性につ

いて従来とは大きく異なる見方が出されている。それは「性生活」というものが「出生後間もなく認められる」という点であり，「性的と性器的」というのを区別する必要があるという点である。ここでは「性的」という概念について，別のフロイトの著作から分かりやすく見てみる。

「性的なものという概念は精神分析学では普通一般に言うよりも遙かに多くのものを包含するのである。（中略）われわれはむしろ，好んで精神的性欲 Psychosexualität という言葉を用いるのであり，この性生活の精神的要素を見落したり，過小評価したりしないという点を重視するのである。われわれは性 Sexualität という言葉を，ドイツ語の「愛する」lieben という言葉と同じように広い意味に用いるのである。」（「『乱暴な』分析について」フロイト著作集 9 ,57頁）

ここでは「性的」という言葉を，「精神面」に重点を置いたものとしている。そうすると，それに対する「性器的」というのは，「身体面」に重きを置いたものとなる。ここにフロイトの独創が見られる。すなわち，性というものが主に生殖に関わるものと捉えられていたのに対し，その精神面に注目する見解を出したことである。そして「性＝愛する」とまで言い切っている。これは当時としては大胆な発想と言える。そしてそのような考えからすると，「性生活」が「出生後間もなく認められる」というのも，そこから「人を愛する」という認識が創られ始めていくという意味では理解出来る。「その過程の端緒につく」という意味においてはである。けれどもフロイトの言う意味はそうではない。

そこでの問題は「性生活は，各身体区域からの快感獲得機能を包括している」という点である。そして「成長するに及んで生殖活動という目標の下に統合される」が，「快感獲得機能と生殖活動という二つの働きが完全には一致しない」と説かれている。ここでは「快感獲得機能」と「生殖活動」とが，対立したあり方に置かれている。すなわち，通常は前者が後者に統合されるが，そうでない場合もあると言い，それが先に述べた「倒錯行為」だと言うのである。

このように見てくると，フロイトの言う「愛」というのは，「快感獲得機能」のことなのかと思えてくる。他人への愛というのも，自分の「快感獲得機能」のためなのかとである。あくまで本能に規定された身体的なものが，フロイトの言う「愛」なのである。「精神的性欲」というのも，このレベルのことである。

「出生のそのそもの初めから快感区域になり，精神に対してリビドー的要素を向ける最初の器官は口である。すべての精神活動の第一の目標は，この区域の要求に満足を与えることである。いうまでもなくこの区域は，第一に栄養によって自己保存に役立つ。しかしわれわれは生理学を心理学と取り違えてはならない。幼児が早期において頑強に固執する指しゃぶりには，満足を求める要求が現われている。これは食物摂取から発し，またそれに刺激されたものであるにしても，後になると栄養とは無関係に快感獲得を目指しておりそれ故に当然『性的』と呼ぶことが許されるし，そう呼ぶ必要がある。」（163頁）

「栄養とは無関係に快感獲得を目指して」いるから，「性的」と呼ぶという。やはりそうなのだと思わされる。快感獲得＝性的という図式がそこにある。フロイトがここで述べていることで大事なのは，私達の立場で言うと，「快の認識の発展」ということである。初めは食を満たされることで生じた快の認識が，食で満たされること以外でも生じるようになるという，子どもの発達の現象である。そこでは，快の認識の膨らみが行われていくということであり，たとえば，指をしゃぶることで自ら快を得ようとするのは，赤ちゃんの行為を見れば明らかである。指

を上手に曲げて，あたかもオッパイを吸うようにしている。それでお腹が満たされるわけでなくても，気持が落ち着いて眠りに入っていったりする。それも赤ちゃんなりの快の認識の発展という，精神の発達のあり方と言える。

この意味で，フロイトの言うことの現象は理解できるのであるが，その意味の取り方には問題を感じるのである。それは「口」という器官の強調である。「すべての精神活動の第一の目標は，この区域の要求に満足を与えることである」というようにである。けれども，フロイトも述べているように，口というのは食物摂取の時の入り口としての大切な器官であり，初めに発達する皮膚粘膜の感覚器官でしかない。確かに，何でも口に入れてみたり，指をしゃぶったりするという行動はあるものの，それは口を満足させるというより，それによって，自分なりの快の像を描くということに意味があるのであり，それは感覚器官として最初に発達する口によってなのである。そこでの指もまた，母親のオッパイの像を描くものとして意味がある。母親のオッパイを快と感じるなら，その替わりのものとしての指でしかない。フロイトが言う「幼児が早期において頑強に固執する」という指しゃぶりにしても，どの子も「頑強に固執する」とは限らないのが事実である。そこまで指を求める子もいれば，そうでない子もいる。親が他の方法で子の快の認識を満たしてやるなら，そこまで指に固執することはないからである。それゆえ，そこまで指にこだわるのは何故なのか，そこでの親の関わりはいかなるものかという，その子の育ちの過程に目を向けて，「頑強に固執する」意味を分かっていく必要がある。

けれども，フロイトにとって「快感獲得＝性的な器官」としての口は，その実際のあり方以上に，その役割を強調せねばならないものとなった。それは精神の基本を，本能に置いているからである。すなわち，最初に快を獲得する器官である口は，同時に性的な本能が現れるものでなければならないのである。そこにリビドーという性的エネルギーを置くことにもなっていく。そしてこのリビドー状態の時期を「口唇期」と呼ぶ。このような説明の仕方は，この後の「発達期」においてもなされていく。

「すでにこの口唇期 orale Phase の期間中にも，歯の発生とともにサディスティックな（破壊的）衝動が散発的に出現する。これは次いで第二の発達時期になるとさらに広範囲に拡ってゆく。この時期には攻撃性と排泄機能の満足が追求されるために，われわれはこれをサディズム的な肛門期 sadistisch-anale Phase と呼ぶ。」（163頁）

フロイトの本能論の立場として，「性的な本能」と「破壊本能」とは，人間の精神を規定する根本的なものであり，前者が存在する時は後者も存在するとされる。その意味で，口での性的な快感獲得とともに，歯による破壊的な衝動が現れるというわけである。そして更に，肛門が問題になってくると，排泄による快感の獲得とともに，外へ排泄物を押し出してやるという，破壊的な衝動も見られるというわけである。ここでもまた肛門という器官の感覚が，快感獲得＝性的とされている。

けれども，排泄による快感獲得というのは，ただ自然になされるわけではない。口での摂取もそうであるが，親の働きかけによって，それが快であるように感じるようになっていくのであり，ただ排泄物を垂れ流すだけの赤ちゃんから，それを溜めて排泄するようになっていく，その発達過程によってであることを見てとれねばならない。その過程で，快という認識も発達する。それは肛門が快であるというより，身体によけいな物を体外に出すことによる，身体自体の快である。肛門は，排泄の最後の器官であり，それ以上でも以下でもない。これがまた，口同様に大事な性的器官となってしまうのは，先のような本能論のみならず，異常性欲と言われる現象（同性愛）に引きずられてしまっているからである

(肛門粘膜を使っての性的な大人の行為)。

「第三の時期はいわゆる男根期 phallishe Phase である。これは性生活の先駆であり，すでに性生活の最終的段階に非常に近づいている。注目すべきことは，この時期に一役演じるのが両性の性器ではなくて，むしろ男性性器（男根 Phallus）だけであるという事実である。女性性器はいつまでも知られずにいるのである。」(164頁)

口，肛門に続いて男根という性器が問題にされている。口や肛門というのは，摂取と排泄に実際に用いている器官であるが，性器はまだその機能を発揮する時期ではない。生殖活動に使われるのは，ずっと後の時期である。それがここで出されているのは，生殖の時の快感獲得ではなく，それ自体を触れることによる快感獲得を問題にしているからである。すなわち，男児の中にそれを弄ぶことで，粘膜接触による快感を得ているように見える現象があり，それを性的なものと見ているのである。まさに精神的性欲の現れとしてである。

けれども，身の回りにいる子どもを見れば分かるように，どの男の子もそういう行為をしているわけではない。大抵は自分の好きな人や好きな物に関わっていき，そこでの関わりの認識を，どんどん膨らませていく。もちろん，排泄の時に触れる自らの性器に関心を持ち，それを触ったりすることはあっても，そこからの快感を得るよりも，もっと別の方に認識を膨らませていくのが通常の発達の仕方である。それが何故に，自分の性器にそれほどの関心を持ち，その粘膜を刺激して快の認識を得ることに専念するようになるのか。それはやはり，その子どもの生育過程・生活過程を見る必要がある。しかるに，フロイトの説では，全ての男児がそういう行為を必然的に行うことになる。これもまた，彼の「本能論」から来るものである。

それゆえ，先の「指しゃぶり」という現象もそうであるが，フロイトの生きた時代に生活する子どもにおいて，「指しゃぶり」や「性器の弄び」というのが，ごく当たり前に見られたのが事実とするならば，そこではどのような社会生活が営まれていたのか，そこではどのような家庭教育がなされていて，当時の子どもはどんな家庭生活を送っていたのかということに，強い関心を持つことにもなる。すなわち，フロイトが治療するようになった患者の，子供時代の過ごし方と，その認識の創られ方に，大いに関心が向くのである。

「男根期とともに，この時期が経過してゆく期間中に，早期幼児性欲は最高潮に達し，次いでその衰退に向かう。(中略）しかしその後に両性が歩む道は自ら異なってくる。男児はエディプス期に入り，男根を手で玩弄しはじめるが，それと同時に母に対して男根によって何らかの性的な働きかけを行う空想を抱く。しかしながらやがて男児は去勢の威嚇を受け，また女が男根を失っている事実を見，この二つの経験の共同作用によって，彼の生涯での最大の外傷を経験する。」(164頁)

これが有名な「エディプス・コンプレックス」である。この「エディプス」という名は，古代ギリシャ悲劇「エディプス王」に由来するもので，そうとは知らず自分の父を殺し，母と結婚してしまい，その事実を知った後に自ら盲目になってしまう，エディプスの悲劇に基づいている。それと同じように（と言っても，実の父や母であることは知っている)，父を憎み母を愛するという男児の心性を，フロイトがエディプス・コンプレックスとしたのである。これも全ての男児に見られるものとした。

そして，子どもが性器をいじるのを，母親に対する行為と見なし，それが父親からの去勢威嚇（「オチンチンを切るよ」）を受けるのみならず，女性の身体に男根がないのを見て，自分もそうなることを恐怖するというのを，最大の「心的外傷」とするの

である。

このような捉え方に対し，馬鹿馬鹿しいと一笑に付すことも出来ようが，フロイトが何故にこのような見方をすることになったのか，その意味を見ていくことがより大切である。

まずもって，そこでの当時の親子関係であり，家庭における母親と男児の関係の仕方であり，そこに父親がどのように関わっているか，ということで，とくに子どもに対しての父親の働きかけの特殊性（去勢威嚇など）を見ていく必要がある。また，そこでは家庭という狭い社会での，子どもの育て方がなされていて（現代のように保育園や幼稚園などには行かない），親の影響を大きく受けている現実が見えている。そこで，どのような子どもの認識が育つのか。それが後に，その子の成長にどのような影響を及ぼすことになるのか。

もう一つは，子どもの発達段階についての捉え方である。男根期というのが，大体2才頃で，エディプス期というのは3才頃である。この時期における子どものあり方というのがいかなるものか，その特徴をも踏まえて見ておく必要がある。すなわち自己を主張することの多くなる，この時期（「第一反抗期」とも呼ばれる）において，親はそれにどのように対処していたのかという，認識の発達を踏まえた観点も必要なのである。ただ単に，子どもの自己主張を押さえつける様な関わりだけでは，その子どもの自主性もうまく育っていかず，結果として後の成長過程や社会に出てからの生活に，問題が生じることにもなる。そこを当時の子どもは，どのように育てられたのか。「去勢威嚇」の様な，上からの脅しだけで対応されては後の成長に問題を得ることにもなる。

これらの発達過程について，フロイトは次のように述べる。

「この過程はいつでも完全に進められるというものではない。この発達の中では，制止 Hemmung が性生活の多方面にわたる障害として現われる。それはそれ以前の状態へのリビドーの固着として存在する。この固着は正常の性目標と一致しない傾向で，それを『性倒錯』と呼ぶ。このような発達制止で顕在性のものには，たとえば同性愛がある。分析操作が証明するところでは，同性愛的な対象結合はすべての症例に存在しているものであるが，ただ大抵の場合それが『潜伏性』のままに保たれている。」（165頁）

これはフロイトの言う発達段階を，まともに辿らないことによる障害が後に出てきて，様々な性に関する問題として現われていき，それが神経症などに結びついていくという，フロイトの捉え方であり，フロイトなりに子どもの発達段階の重要性を述べているともいえる。けれども，これまで見てきたように，「快感獲得機能」を発達の大きな要因として展開されてきている捉え方には，身体のあり方を重視する生物学的な見方が基本にあり，それは当時の医学界を席巻していたもので，フロイト自身そこに身を置いていた過去がある。もちろんフロイトは，その立場を離れて「精神分析」という学派を創ったのであり，それによって主流となっていた医学界からの反発も得るのであるが，基本的には同じ立場にいたということが言える。それが彼の「本能論」の基盤にある。

それゆえ，「生活」の捉え方も，快感獲得機能がどのようになされているかという点に的が絞られていき，その限りでの社会関係（主として親との関係）が問題にされていく。それが彼の論の展開を狭く限界づけていたものである。

とは言え，彼が展開した「精神分析理論」は，彼が患者を治療する過程で創ったものであり，治療の「事実」に基づいたものである。いかに狭く限界づけられたものであっても，精神医学の世界において，これ以上の「理論」はこれまで存在しないゆえ，そこから更に学んでいく必要がある。

引用・参考文献

1）薄井坦子：科学的看護論，第3版，48，日本看護協会出版会，1997.

Lectures

What Academic Achievement did Freud Leave ?

—Restoration of Freudian Theory（2）—

Yuji Fuse

【Key words】 Eros,death instinct,infantile sexuality,Oedipus complex

Yuji Fuse : Miyazaki Prefectural Nursing University